

# 世界経済は力強さに欠ける展開に ——注目点は金融市場の不安定化

丸紅経済研究所  
所長 美甘哲秀

2015年米国経済が好調な中、中国の第3四半期のGDP成長率は6年ぶりに7%を割り込んだ。また新興国においては石油・資源価格の下落などから成長率が鈍化、日本においても第2四半期は回復したものの第1四半期のGDPはマイナス成長となった。2016年世界経済はどうなるのか。

### 新興国の成長鈍化進む世界経済

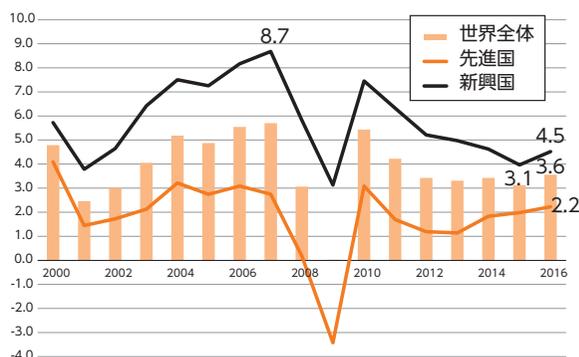
21世紀に入って15年が経過した。その中間点にあたる2008年にリーマンショックが勃発したが、「リーマン前」と「リーマン後」では世界経済の風景は一変した。前半では、中国を中心に新興国の景気は活況を呈し、先進国を大きく上回る成長が実現した。新興国の成長期待に加え、米国の政策金利が03年には1%まで引き下げられるなど先進国では金融緩和が続いたこともあり、余剰マネーが資源価格を押し上げることもあった。

後半では一転して新興国の成長が鈍化し、中国については従来の10%から7%台が定着した。11年前半をピークに資源価格の下落が始まり、原油価格も14年央から急落した。また15年末には米国が出口戦略を模索する中でいよいよ利上げに踏み切り、今後金融市場が不安定化する恐れが浮上している。

16年の世界経済全体は3%台半ばにとどまる見込みである。好不調を見る上での目安が4%程度とすれば、12年以降5年連続して力強さに欠ける展開が続く可能性が高い。先進国では2%程度、新興国では4%台半ばとなる。世界経済のブーム期(04～07年)においては先進国では3%、新興国では8%の成長を維持しており、新興国の弱

さがあらためて確認される(図表1)。

〈図表1〉世界の経済成長率(%)



(出所) IMF

### 成長見通しの米国、ユーロ圏

#### 米国経済 —— 個人消費中心に安定成長継続

リーマンショック直前の実質GDPを100とすれば、現在、ユーロ圏、日本はようやく100に戻ったところである。米国は110まで拡大している(図表2)。先進国の中では、米国のパフォーマンスは良好である。14～16年にかけて2%台半ばの安定した成長が続く見込みである。

家計部門である個人消費や住宅投資は底堅く推移している。雇用の伸びは堅調であり、失業率も低下傾向にある。とりわけ自動車販売(15年: